

1.2 3次元ベクトル空間

この節では3次元ベクトルと3次元ベクトル空間について述べる。この概念は後に n 次元ベクトル空間へと拡張される。3次元ベクトルは幾何的なものにとらえる事もできるが、拡張されるとその様な見方はできなくなる。ベクトルに対し幾何学的なイメージを持つ事は重要であるが、概念が拡張されたときに、幾何学的イメージにとらわれず抽象的に考える事も重要である。

高校ではベクトル横ベクトルとして

$$\boldsymbol{x} = (x_1, x_2, x_3)$$

と書いていたが、線形解析では2次元ベクトルと同様に通常縦ベクトル (*vector*) で

$$\boldsymbol{x} = \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{pmatrix}$$

と書く。3次元ベクトル全体の集合を R^3 で表し、3次元ベクトル空間 (*3-dimensional vector space*)

という。2つのベクトル $\boldsymbol{x} = \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{pmatrix}$ と $\boldsymbol{y} = \begin{pmatrix} y_1 \\ y_2 \\ y_3 \end{pmatrix}$ が等しいとは $x_1 = y_1, x_2 = y_2, x_3 = y_3$ を

意味し、 $\boldsymbol{x} = \boldsymbol{y}$ と書く。

3次元ベクトル空間には和と実数倍が以下の様に定義される。

$$\boldsymbol{x} = \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{pmatrix}, \boldsymbol{y} = \begin{pmatrix} y_1 \\ y_2 \\ y_3 \end{pmatrix} \text{ に対し和を}$$

$$\boldsymbol{x} + \boldsymbol{y} = \begin{pmatrix} x_1 + y_1 \\ x_2 + y_2 \\ x_3 + y_3 \end{pmatrix}$$

で、また実数 α とベクトル \boldsymbol{x} に対し実数倍を

$$\alpha \boldsymbol{x} = \begin{pmatrix} \alpha x_1 \\ \alpha x_2 \\ \alpha x_3 \end{pmatrix}$$

と定義する。

ベクトルに対し、始点を原点に平行移動したものを考える。このときベクトルとベクトルの終点を対応させる事により、3次元ベクトル空間の元であるベクトルと3次元ユークリッド空間の点が

一対一に対応する。この様に見たときベクトルを位置ベクトルと呼ぶ。3次元ベクトル空間を R^3 という記号で書いたのも、この見方から来ている（更に付け加えて言えば、成分表示している事は、このユークリッド空間に直交座標を1つ固定して考えている事を意味する）。

和と実数倍に関しては次の8つの性質が基本的である。

命題 1.4 (1) [結合法則] 任意のベクトル x, y, z に対し $(x + y) + z = x + (y + z)$

(2) [交換法則] 任意のベクトル x, y に対し $x + y = y + x$

(3) [零ベクトルの存在] 零ベクトルと呼ばれるベクトル 0 が存在して任意のベクトルについて $x + 0 = x$

(4) [逆ベクトルの存在] 任意のベクトル x に対し逆ベクトルと呼ばれるベクトル $-x$ が存在して $x + (-x) = 0$

(5) [ベクトルに関する分配法則] 任意のベクトル x, y と任意の実数 α に対し

$$\alpha(x + y) = \alpha x + \alpha y$$

(6) [実数倍に関する分配法則] 任意のベクトル x と任意の実数 α, β に対し

$$(\alpha + \beta)x = \alpha x + \beta x$$

(7) [実数倍に関する結合法則] 任意のベクトル x と任意の実数 α, β に対し

$$(\alpha\beta)x = \alpha(\beta x)$$

(8) [単位倍] 任意のベクトル x と実数 1 に対し $1x = x$

証明 (1) のみ証明しよう（証明の細部の理解でなく、何故このような事が必要なのかを理解するよう

に）。ベクトルをそれぞれ $x = \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{pmatrix}$, $y = \begin{pmatrix} y_1 \\ y_2 \\ y_3 \end{pmatrix}$, $z = \begin{pmatrix} z_1 \\ z_2 \\ z_3 \end{pmatrix}$ とする。実数 a, b, c に対して

は結合法則 $a + (b + c) = (a + b) + c$ が成立している。 $x + y$ は定義により $\begin{pmatrix} x_1 + y_1 \\ x_2 + y_2 \\ x_3 + y_3 \end{pmatrix}$ である。さら

に定義により $(x + y) + z = \begin{pmatrix} (x_1 + y_1) + z_1 \\ (x_2 + y_2) + z_2 \\ (x_3 + y_3) + z_3 \end{pmatrix}$ となる。同様に $x + (y + z)$ は $\begin{pmatrix} x_1 + (y_1 + z_1) \\ x_2 + (y_2 + z_2) \\ x_3 + (y_3 + z_3) \end{pmatrix}$

となる。実数の結合法則より、2つのベクトルの各成分が等しいので $(x + y) + z = x + (y + z)$ が成立する。■

演習問題 1.3 命題 1.4 を証明せよ。

命題 1.1 及び命題 1.4 を基本的と言ったのは2つの理由がある。1つはベクトルの諸々の性質はこの8つの性質から導かれる事である。成分表示の形を用いなくても、8つの性質だけから示されるという点がポイントである。

演習問題 1.4 次を命題 1.1 から導け（ベクトルの成分表示を用いなくて）。

- (1) $-x = (-1)x$
- (2) 任意の実数 α に対し $\alpha 0 = 0$

成分表示を用いない証明を考えると、演習問題 1.2 と演習問題 1.4 は全く同じ証明になる事が分かるであろう。

3次元ベクトルに対し内積を定義する。ベクトル $x = \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{pmatrix}$ とベクトル $y = \begin{pmatrix} y_1 \\ y_2 \\ y_3 \end{pmatrix}$ に対し、その内積 (x, y) を

$$(x, y) = x_1y_1 + x_2y_2 + x_3y_3$$

で定義する。

2次元のベクトルの場合と同様に次の命題が成立する。

命題 1.5 ベクトル x, y の長さを $|x|, |y|$, ベクトル x とベクトル y のなす角を θ とすると

$$(x, y) = |x| |y| \cos \theta$$

が成立する。

これを示すために次の命題を用いる。証明は容易なので演習問題としよう。

命題 1.6 $x, y, x', y' \in R^3$ と $\alpha \in R$ に対し次が成立する。

- (1) $(x + x', y) = (x, y) + (x', y)$
- (2) $(\alpha x, y) = \alpha(x, y)$
- (3) $(x, y + y') = (x, y) + (x, y')$
- (4) $(x, \alpha y) = \alpha(x, y)$
- (5) $(x, y) = (y, x)$
- (6) $(x, x) = |x|^2$

演習問題 1.5 命題 1.6 を証明せよ。

命題 1.5 の証明： x, y を位置ベクトルと考え、それが表す点をそれぞれ A, B とする。3角形 OAB (O は原点) を考える。 $OA = |x|, OB = |y|, AB = |y - x|$ なので、3角形 OAB に余弦定理を適用すると、

$$|y - x|^2 = |x|^2 + |y|^2 - 2|x| |y| \cos \theta$$

が成立する。命題 1.6 より、 $|y - x|^2 = (y - x, y - x) = (y + (-1)x, y + (-1)x) = (y, y + (-1)x) + ((-1)x, y + (-1)x) = (y, y) + (y, (-1)x) + ((-1)x, y) + ((-1)x, (-1)x) = (y, y) - (y, x) - (x, y) + (x, x) = |x|^2 + |y|^2 - 2(x, y)$ となる。よって $(x, y) = |x| |y| \cos \theta$ が成立する。 ■

命題 1.5 の系として次が従う。ただしゼロベクトル 0 は任意のベクトルと直交するものとする。

系 1.7 $x \perp y \iff (x, y) = 0$

内積の 1 つの応用として空間内の平面の方程式を求めておこう。

命題 1.8 空間内の平面を P とすると、定数 a_1, a_2, a_3, b が存在して

$$P = \left\{ \mathbf{x} = \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{pmatrix} \mid a_1x_1 + a_2x_2 + a_3x_3 = b \right\} \text{ となる。逆に } a_1, a_2, a_3 \text{ のどれかが } 0 \text{ でなけれ}$$

$$\text{ば } P = \left\{ \mathbf{x} = \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{pmatrix} \mid a_1x_1 + a_2x_2 + a_3x_3 = d \right\} \text{ は平面を表す。}$$

証明 ここではベクトルと空間の点を同一視して考える。 P を空間内の平面とする。この平面に直交

$$\text{するベクトルを 1 つ固定し } \mathbf{a} = \begin{pmatrix} a_1 \\ a_2 \\ a_3 \end{pmatrix} \text{ とする。また } P \text{ 上のベクトルを 1 つ固定し } \mathbf{x}_0 = \begin{pmatrix} c_1 \\ c_2 \\ c_3 \end{pmatrix}$$

とする $\mathbf{x} = \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{pmatrix}$ を平面上の任意の点とすると、 $\mathbf{x} - \mathbf{x}_0$ は平面上に乗っていると考えられるの

で \mathbf{a} と直交している。よって $(\mathbf{a}, \mathbf{x} - \mathbf{x}_0) = 0$ が成立する。成分で書き直すと $a_1(x_1 - c_1) + a_2(x_2 - c_2) + a_3(x_3 - c_3) = 0$ となる。 $a_1c_1 + a_2c_2 + a_3c_3 = b$ とおくと、 $a_1x_1 + a_2x_2 + a_3x_3 = b$ が成立している。

a_1, a_2, a_3 のどれかは 0 でないとする。今簡単のために $a_1 \neq 0$ として証明する ($a_2 \neq 0$ 等の場合

$$\text{も同様に示すことができる)。} \mathbf{x}_0 = \begin{pmatrix} c_1 \\ c_2 \\ c_3 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \frac{d}{a_1} \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix} \text{ とすると } \mathbf{x}_0 \in P \text{ である。} \mathbf{a} = \begin{pmatrix} a_1 \\ a_2 \\ a_3 \end{pmatrix}$$

とおき、 P の任意のベクトルを \mathbf{x} とすると $(\mathbf{a}, \mathbf{x}) = d$ となっている。 $(\mathbf{a}, \mathbf{x}_0) = d$ なので、 $(\mathbf{a}, \mathbf{x}) = (\mathbf{a}, \mathbf{x}_0)$ がとなり、 $(\mathbf{a}, \mathbf{x} - \mathbf{x}_0) = 0$ が成立している。よって \mathbf{a} と $\mathbf{x} - \mathbf{x}_0$ は直交しているので、 P は \mathbf{a} と直交する平面を表す。■

ここで 3 次元ベクトルに対し外積 (outer product) (またはベクトル積 (vector product)) を定義する。外積は 3 次元ベクトルに対してのみ定義される。

$$\text{定義 1.9 } \begin{vmatrix} a & b \\ c & d \end{vmatrix} = ad - bc^{(1)} \text{ と書く事にする。} \mathbf{x} = \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{pmatrix}, \mathbf{y} = \begin{pmatrix} y_1 \\ y_2 \\ y_3 \end{pmatrix} \text{ に対し}$$

$$\mathbf{x} \times \mathbf{y} = \begin{pmatrix} \begin{vmatrix} x_2 & y_2 \\ x_3 & y_3 \end{vmatrix} \\ \begin{vmatrix} x_3 & y_3 \\ x_1 & y_1 \end{vmatrix} \\ \begin{vmatrix} x_1 & y_1 \\ x_2 & y_2 \end{vmatrix} \end{pmatrix}$$

を \mathbf{x} と \mathbf{y} の外積という。

⁽¹⁾これは後期に扱うが、2 次行列の行列式である。

命題 1.10 x と y に対し $x \times y$ は x, y と直交する。また $x \times y$ の絶対値は x と y の張る平行 4 辺形の面積であり, $x, y, x \times y$ が右手系をなす。

証明 内積 $(x \times y, x), (x \times y, y)$ はそれぞれ 0 になるので $x \times y \perp x, x \times y \perp y$ が分かる。

x と y のなす角を θ とすると, $(x, y) = |x||y| \cos \theta$ である。 x と y の張る平行 4 辺形の面積を S とすると, $S^2 = (|x||y| \sin \theta)^2$ より, $S^2 = |x|^2|y|^2 - (x, y)^2$ を得る。これを計算すると,

$$S^2 = \begin{vmatrix} x_2 & y_2 \\ x_3 & y_3 \end{vmatrix}^2 + \begin{vmatrix} x_3 & y_3 \\ x_1 & y_1 \end{vmatrix}^2 + \begin{vmatrix} x_1 & y_1 \\ x_2 & y_2 \end{vmatrix}^2 \quad \text{で } |x \times y| \text{ は平行 4 辺形の面積になる。}$$

また $e_1 \times e_2 = e_3$ より $x, y, x \times y$ が右手系をなす事が分かる。 ■

命題 1.11 外積は次の性質を持つ写像と考えられる。

(1) [多重線型性] $x \times y$ は各成分に関して線型である ;

- 1) 任意のベクトル x, x' に対し $(x + x') \times y = x \times y + x' \times y$
- 2) 任意のベクトル x と任意の実数 α に対し $(\alpha x) \times y = \alpha(x \times y)$
- 1') 任意のベクトル y, y' に対し $x \times (y + y') = x \times y + x \times y'$
- 2') 任意のベクトル y と任意の実数 α に対し $x \times (\alpha y) = \alpha(x \times y)$

(2) [交代性] $y \times x = -x \times y$

(3) [基本ベクトルに対する値] $e_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix}, e_2 = \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix}, e_3 = \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}$ とすると

$$e_1 \times e_2 = e_3, e_2 \times e_3 = e_1, e_3 \times e_1 = e_2$$

逆にこの 3 つの性質で外積は特徴付けられる。

命題 1.12 $(x \times y, z)$ は x, y, z が右手系のときは x, y, z が張る平行 6 面体の体積になる。 x, y, z が左手系のときは, 体積にマイナスをつけたものになる。

演習問題 1.6 命題 1.11, 1.12 及びを証明せよ。